

# 卒FIT

家庭用の太陽光発電の余剰分を、大手電力が定額で買い取る固定価格買い取り制度(FIT)は、期間を10年とする。2009年11月に前身の制度が始まり、今年11月から順次買い取りが終わる。全国では今年11~12月で約53万件、23年までの累計では約165万件(計670万kwワット)が「卒業」となる。各世帯は発電した電力をどうするか新たに選択することになり、大手電力か新電力と契約して売電するか、余った分を蓄電池にためて夜間に自家消費する。新電力や蓄電池メーカーは、大手電力から契約を奪う好機と見て、さまざまなプランやサービスを出し始めている。

# 「卒FIT」争奪戦

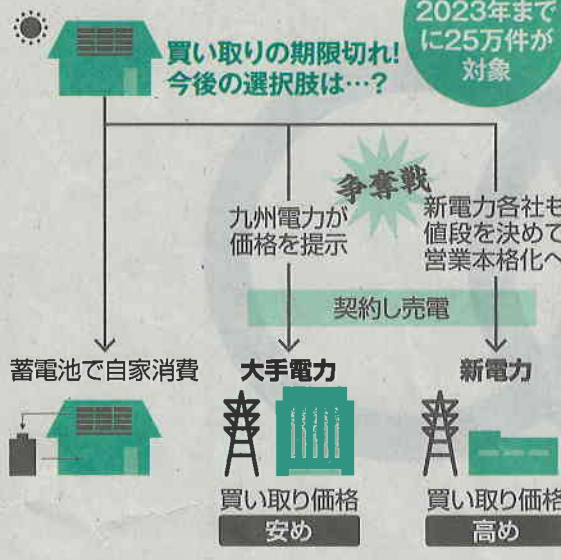
## 太陽光発電買い取り 順次期限切れ

家庭用の太陽光発電で、余った電気を固定価格で買い取る制度(FIT)の期限が、11月から順次切れる。九州電力は6日、契約が切れた「卒FIT」について、1kwワットあたり7円で買い取るを発表した。新電力の各社も、今回の価格を見て戦略を練り、営業を本格化させる。太陽光の先進地・九州で、卒FITをめぐる争奪戦が始まる。

## 九電「7円」と発表

卒FITの対象は2023年までに、全国で累計165万件、出力670万kwワット分、九州では累計で25万件、出力108万kwワット分となる。出力ベースで見ると、九州は全国の約16%の規模だ。九電が6日発表した新たな買い取り価格は7円。先行して価格を発表した他の電力大手は、東北電力の9円を除き7~8円だった。全国的に見れば、電力取引市場の相場よりも同等か少し

### 家庭用太陽光発電の「卒FIT」が11月にスタート



し安めの水準だ。制度開始当初の買い取り価格48円に比べ、差は大きい。九電は買い取り価格のほかに、新たなプランや特典を公表した。その一つが、余った電気を九電に売らずに「預ける」というもの。夜間など電気の消費が多い時間帯に、預かった分を使ったとみなして卒FIT世帯の電気の使

用料金を割り引くもので、「仮想蓄電」と呼ばれる。余った電気を無駄にせず自家消費したいが、蓄電池は高くて買えない。九電は、そうした世帯の需要

## 新電力も営業本格化

対抗する新電力の各社は今後、買い取りの値段を決めてプランやサービスを固め、営業を本格化させる。

西部ガス(福岡市)や自然電力(福岡市)などは、九州での買い取りを検討しているという。

新電力が卒FITの電気を買うのは、自社で売る電

気について、太陽光や風力など再生可能エネルギーによる発電比率を上げる目的

を囲い込み、新電力に契約を奪われるのを防ぐ狙いだ。背景には、家庭用の太陽光は、「夏場など需要が多い時期は重要な供給力」(九電)という事情もある。

がある。小売事業者は、2030年度に、化石燃料を使わない電気の比率を44%にすることが義務づけられている。

ただ、九州ならではの難しさもある。九州では太陽光の普及が進む。ある新電力の担当者は、供給が多い日は、九州の電力取引市場の相場が全国に比べて安いと指摘。「市場で安く調達できるなら卒FITを高い値段で買うメリットが薄い」と、参入に二の足を踏む。

そんな中、価格以外の価値をアピールするのが、NFTスマイルエナジー(大阪市)だ。北九州市で住宅から買った電気を、市などが出資する小売業者を通じて、市内で売電する方針だ。地域内でお金が回ることで活性化につながるとされる電気の「地産地消」の仲介役だ。担当者は「地域貢献という価値も大事にする」と話す。(女屋泰之)